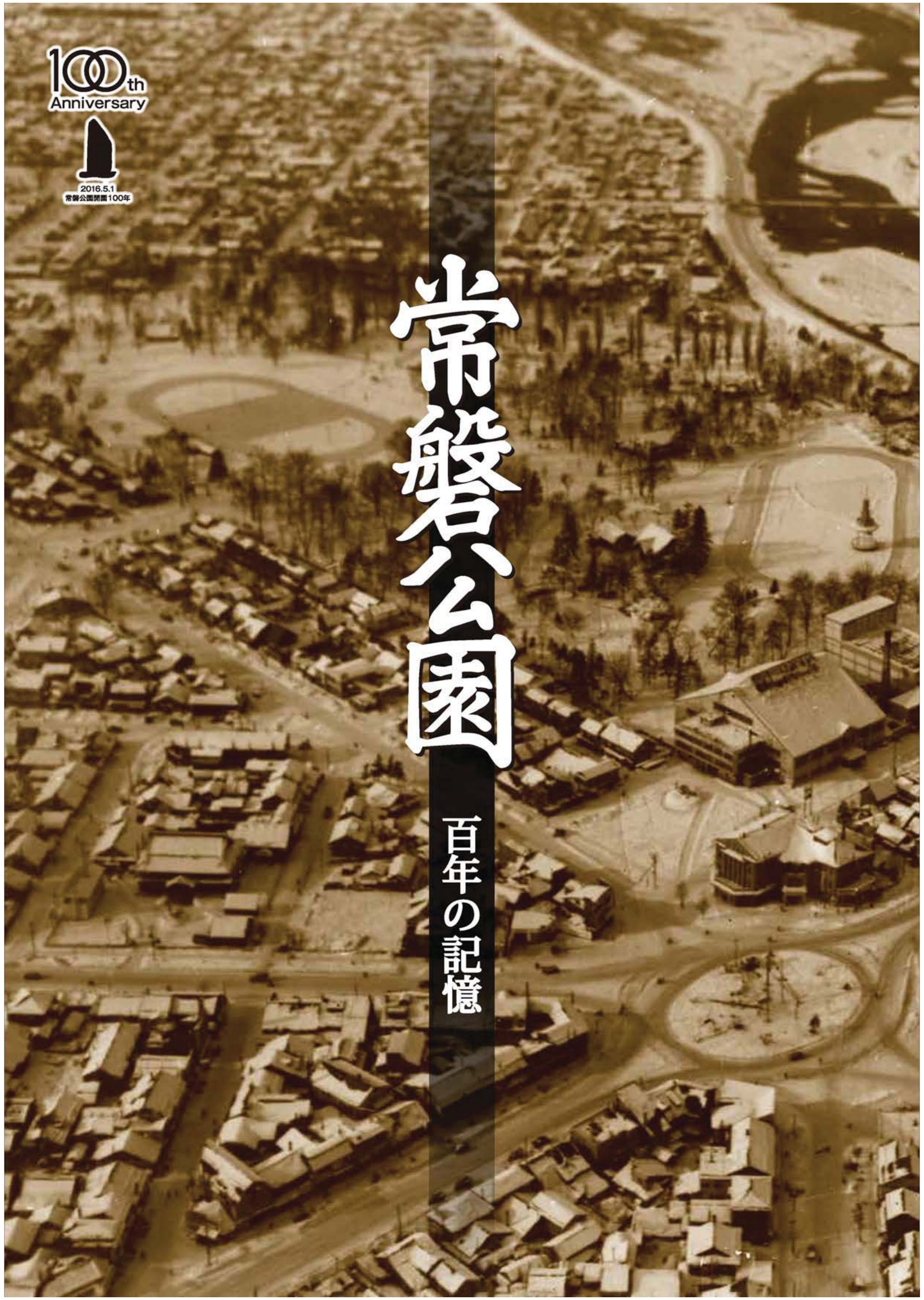
常磐公園

百年の記憶

100th Anniversary
2016.5.1
常磐公園開園100年



アクセス
JR旭川駅西連絡通路から徒歩15分
道央道旭川鷹栖ICから自動車約20分

監修／旭川市土木部公園みどり課
企画・発行／公益財団法人旭川市公園緑地協会
写真協力／旭川市中央図書館
発行年月／平成28年5月

常磐公園100年によせて

旭川市長　西川　将人

私たちのまち旭川は、大雪山連峰や、石狩川など豊かな自然と都市が調和した美しいまちです。市内には大小合わせて約430もの公園があり、その代表であります大正5(1916)年5月に開園した常磐公園が、今年(2016)、開園100年という大きな節目の年を迎えました。黎明期に石狩川と牛朱別川のふたつの大きな川に挟まれた荒涼たる湿地帯に緑豊かな公園を築いた先人の功に敬意を表するとともに、この公園を守り、愛し続けてくださった皆様に心から感謝を申し上げます。

中心部にありながら緑にあふれ、穏やかな雰囲気に満たされた常磐公園は、旭橋や大雪の山々とともに旭川市のシンボルとなる景観をつくっています。心を癒す都心のオアシスであると同時に、多くの文化施設や野外彫刻が立ち並び文化・芸術の先進的な役割を果たしてきました。さらには数々のイベントが開かれる賑わいと交流の“ひろば”として、親から子、そして孫へと多くの思い出が受け継がれてきました。平成9(1997)年、市民投票などで決める「旭川八景」に選ばれたことは、常磐公園が時代とともに少しずつ姿を変えながら、市民の暮らしに溶け込み、愛されてきたことの証であったと言えるでしょう。

このかけがえのない常磐公園が、100年後も多くの市民の安らぎと笑顔あふれる公園であり続けることを願うとともに、未来へと引き継いでいくことを使命とし、開園100年の挨拶とさせていただきます。

表紙写真：昭和35年頃の常磐公園周辺
題　　字：渡辺錠太郎 第10代 第七師団長(在任/大正15年～昭和4年)

【明治43年の旭川市街地図】
石狩川と牛朱別川に挟まれた中州に「公園予定地」の文字が見える

- 平成元年　日本の都市公園100選に認定
- 平成2年　旭川開村100年記念「日本のまつり・旭川」会場
- 平成5年　第1回花フェスタ旭川会場(=写真)
- 平成6年　旭川中央図書館開館
- 平成9年　旭川八景に指定

▲花フェスタ旭川

- 平成17年　青少年科学館が閉館移転
- 平成22年　旭川開村120年記念
  「北の恵み 食べマルシェ」会場(=写真)
- 平成28年　常磐公園開園100年

▲常磐公園

▲食べマルシェ開催

1989(平成1)～1997(平成9)　2005(平成17)～2016(平成28)

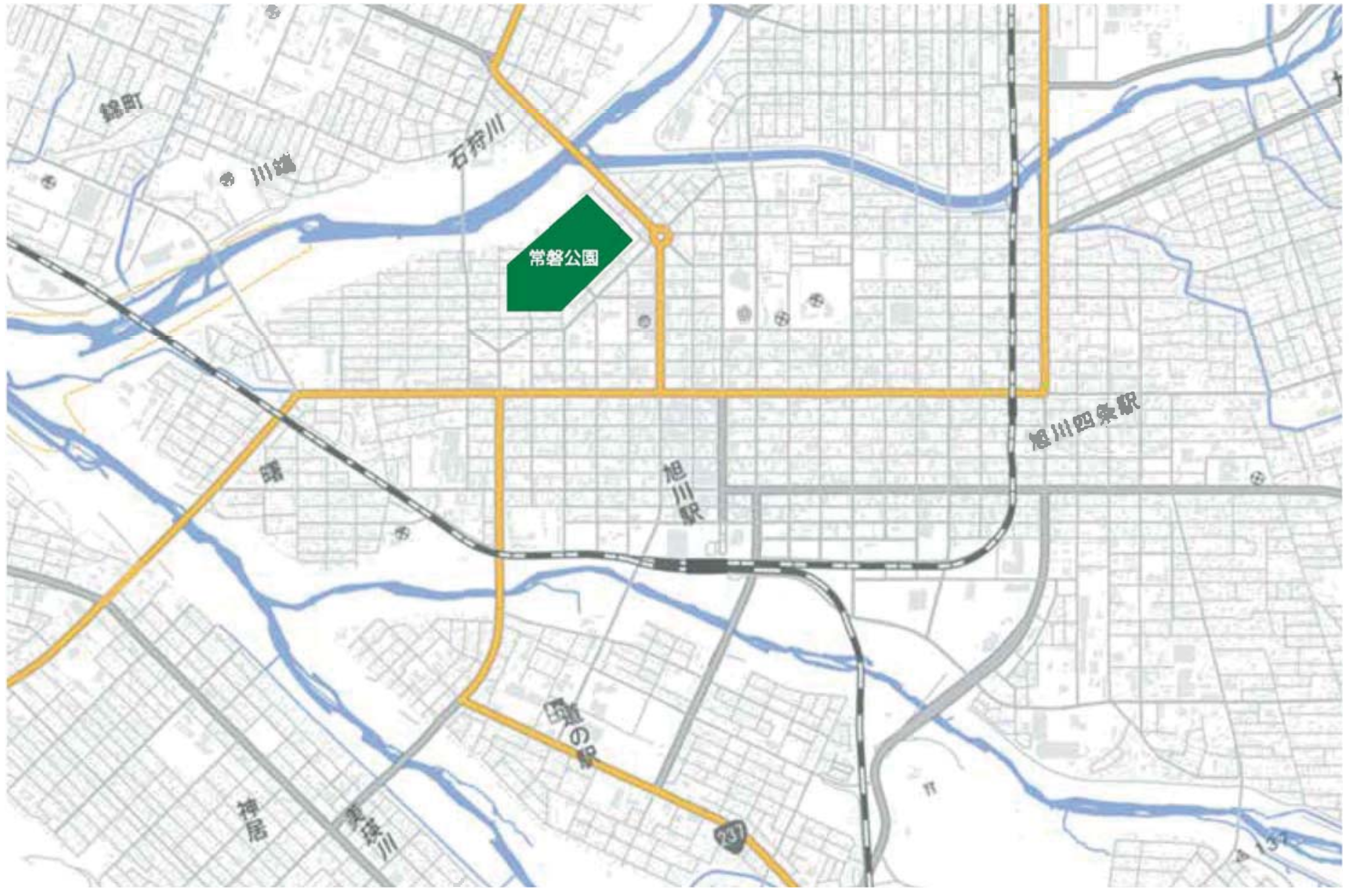
公園の歴史をたどる

100年の時がつくりあげたまちのオアシス

中心部唯一のオープンスペースとしてイベント会場の役割も担う常磐公園。開村100年を記念した「日本のまつり・旭川」や「花フェスタ旭川」、「食べマルシェ」などの舞台となり、園内の緑を賑わいで彩っています。

一方、緑のなかに点在する10の野外彫刻と19の石碑は、心静かに文化、芸術と向き合う喜びを教えてくれます。

時代のニーズに応え、まちの発展とともに歩みながら、その姿形を少しずつ変えてきた常磐公園は、平成28(2016)年、開園100年を迎えました。一世紀に渡る時の流れは、その時々の時代背景と歴史と文化、まちと人々を育みその想いを伝えます。常磐公園開園までの経過と変遷の歴史をたどります。



【平成27年の旭川市街地図　国土地理院電子地図より】

1916-2016

● 明治34年　旭川町村制実施準備委員会で公園設置決定
● 明治37年　日露戦争始まる（～明治38年）
● 明治41年　近文衛戍地分離問題が起こる
● 明治43年　「旭川町対第七師団協定書」により近文衛戍地分離問題解決
　　　　　　石狩川左岸中島共有地に公園造成を決定
● 大正元年　公園造成工事開始
● 大正２年　冷害救済事業として池の掘削を行う

● 大正３年　旭川区制施行
　　　　　　第１次世界大戦始まる（～大正8年）
● 大正４年　築山造成、植樹
　　　　　　旭川区役所公文書、新聞などに「常盤公園」の表記出現
● 大正５年　5月1日常磐公園開園
　　　　　　公園西側出入口として相生橋架橋
● 大正６年　「旭川公園規則」公布により公園看守を配置
　　　　　　園内の橋を架橋し、四阿を建てベンチを配置
● 大正７年　料亭「登喜和園」、茶店二件開業（＝写真）
　　　　　　池水面遊船業開始

▲大正10年頃の常磐公園。
右手奥に写る建物が売店「大中」

● 大正８年　第七師団「凱旋将校歓迎会」開催
　　　　　　牛朱別川氾濫により公園荒廃
● 大正９年　4月から復旧工事開始
　　　　　　回転木馬館開館
● 大正10年　常磐公園グラウンドを修理
● 大正11年　旭川市制が施行
● 大正13年　上川神社頓宮施工
　　　　　　料亭「花月園」開業
● 大正14年　特別工兵演習によって新橋竣工
● 昭和２年　旭橋改築が決まる
● 昭和３年　渡辺錠太郎第七師団長の筆による常磐公園園名碑除幕（＝写真）
　　　　　　第七師団工兵隊が旭橋の仮橋を架橋
　　　　　　牛朱別川切替工事市議会で採択

▲常磐公園園名碑

1901（明治34）～**1913**（大正2）

開園前夜と秘話

第七師団と市民の架け橋になる役割を担う

▲「旭川町対第七師団協定書」によって公園の造成が決まった旭川町中島一帯は荒涼とした低湿地帯だった。明治40年代の撮影

▲造成中の常磐公園を視察する旭川町議会メンバーら。まず池と築山が作られその後、植樹が行われた。写真の背後にはすでに築山が見えている

発足間もない明治政府が文明開化の指針を掲げ「明治６年太政官布告第16号」の政令をもって、公園の必要性と設置を呼びかけたのが明治6（1873）年。それから17年後の明治23（1890）年に村が置かれた旭川は、屯田兵の配備、鉄道上川線の旭川延伸、第七師団移駐などにより発展の一途をたどり、明治34（1901）年には村から町に昇格します。その際に設置された町村制実施準備委員会で公園造成が決議されます。当初の公園予定地は4・5条通18丁目先一帯の陸軍用地「司令部台」（現、願成寺・妙法寺・朝日小学校一帯）。陸軍当局と交渉に当たったものの条件が折り合わず、1条通20丁目以南のウシシュベツ共有地に予定地を変更しますが、ここでも着手には至らないまま、日露戦争が始まります。

戦争が終結し、戦勝の高揚、開拓期の慌ただしさも落着きをみせ始めた明治41（1908）年、第七師団が旭橋を境に分離独立し自治村開村を目指すという「近文衛戍地分離独立問題」が起こります。土木・衛生・教育等の諸事業・施設の一切を担っていた第七師団の将校団が、町の恩恵を受けていないのにも関わらず、一般町民と町税の課税率が同じことに不服を感じていたことに端を発し、話合いが複雑化した結果でした。

明治43（1910）年、師団側と町委員会側とが「旭川町対第七師団協定書」を交わし、長引いていた分離問題が解決します。8項目におよぶ協定書の一項に「旭川町中島に公園を整備し、居住者の和楽を増進する事」が挙げられました。中島は旭川市街地と第七師団を結ぶ師団道路の中間地点。公園を師団と町民とを結ぶ親睦の場として活用したいとの思いが、この一項に込められていたのです。

旭川町議会は同年、「石狩川左岸中島共有地」に公園造成を決議。7月7日付けで東北帝国大学農科大学（北大農学部の前身）の星野勇三助教授に設計を委託し、公園造成が始まったのです。

1914（大正3）～**1918**（大正7）

公園の誕生

着工から4ヵ年大正5年5月１日開園

師団道路側の６町余りの造成工事が始まったのは大正元（1912）年。新聞報道では「名称尚ホ未定ナリ」とされ、「中島公園」「中ノ島公園」などの俗称で呼ばれていました。

大正2（1913）年、冷害救済事業として池の掘削を行い、翌3年には築山・植樹等が整備されます。大正4（1915）年頃になると、旭川区役所公文書、新聞などに「常盤公園」の名称が使われはじめます。公園と接する師団道路周辺の字名「常盤町」から充てられたと考えられます。

大正5（1916）年5月1日、道路、池堀、築山、地ならし、植樹など大体の基礎工事を終え、ここに常盤公園が誕生します。さらに大正6（1917）年には園内の橋を架設、四阿建築、ベンチの設置、また大正7（1918）年、茶店の２ヵ所の設置、２名の池水面遊船業が開始され、徐々に公園としての姿を整えながら、人々の和楽の場所として栄えていくのです。

▲旭川絵葉書の１枚。左下の文字は「緑陰水景に富む市民のオアシス中島公園」。公園名称が定まっていないことがわかる。昭和10年頃撮影

1919（大正8）～**1928**（昭和3）

ふたつの川に挟まれて

まちも公園も大きく変えた河川切替工事

▲牛朱別川河川切替前の常磐公園空撮。昭和4年撮影

上川盆地の大小河川が集中して流れ込む川のまち・旭川にとって、豪雨時の水害対策は緊急課題でした。とりわけ牛朱別川は上流部の流れこそ安定しているものの、9条通18丁目に架かる宗谷線鉄橋を境に蛇行しながら屈曲、石狩川からの派流も流れ込んで旭川の中心部（現５条西４～５丁目近辺）で再び石狩川に合流する複雑な流路をなしていました。そのため豪雨になると石狩川からの逆流も重なり、特に中島（現、常盤）方面に毎年のように浸水被害をもたらしていました。

かつて常磐公園一帯は石狩川と牛朱別川に挟まれ「中の島、中島」と呼ばれ、ススキ、葦、ネコヤナギ、ヤチハンノキ、ドロなどが繁茂する荒涼とした低湿地帯でした。この中の島を大正8（1919）年、牛朱別川の氾濫が襲い公園は大きく荒廃します。

翌9（1920）年に復旧工事が開始され、大正13（1924）年には上川神社頓宮が千鳥ヶ島に竣工しますが、発展を続ける旭川の都市計画上、繰り返される牛朱別川の氾濫への根本的な対策が急務となっていました。

- ● 昭和４年　旭橋架橋工事起工
- ● 昭和５年　牛朱別川 河川切替工事起工
- ● 昭和６年　河川切替工事竣工および旧河川の埋立て工事開始（=写真）
  牛朱別川埋立工事に伴い公園改造計画を企画
  満州事変勃発
- ● 昭和７年　旧牛朱別川跡埋立工事完了
  2代目旭橋完成

▲牛朱別川切替工事の作業風景

1929（昭和4）〜**1932**（昭和7）

- ● 昭和８年　「満州事変記念北海道国防博覧会」開催
- ● 昭和９年　千鳥ヶ池で氷上カーニバル開催
  「日満興産博覧会」開催
- ● 昭和10年　常盤公園園名碑を現在地へ移設
- ● 昭和11年　常盤ロータリーの完成
  昭和天皇行幸
  テニスコート2面設置
- ● 昭和14年　ノモンハン事件起こる
  聖戦興亜博覧会開催
  弥彦神社の分祠造営
- ● 昭和16年　太平洋戦争始まる
  （〜昭和20年）
- ● 昭和19年　貸ボート営業中止
  食料増産のため公園内に畑を造成

▲牛朱別川埋立直後のロータリー付近

1933（昭和8）〜**1944**（昭和19）

- ● 昭和24年　バレーコート2面、バスケットコート1面を新設
- ● 昭和25年　北海道開発大博覧会開幕（=写真）
  天文台完成
- ● 昭和28年　千鳥ヶ池で親子熊の噴水除幕式
  労働会館前に道内初の街頭テレビ設置

▲北海道開発大博覧会ポスター（画・栗谷川健一）

1949（昭和24）〜**1953**（昭和28）

- ● 昭和33年　旭川市役所新庁舎完成
  図書館、公会堂完成
- ● 昭和35年　第1回旭川冬まつり開催
- ● 昭和38年　青少年科学館完成
  常磐プール開設
- ● 昭和41年　旭川空港開港
  第21回冬季国体開会式会場となる（=写真）
- ● 昭和45年　風雪の群像除幕
- ● 昭和47年　風雪の群像が爆破される
  平和通買物公園オープン
- ● 昭和52年　公園改造整備10カ年計画開始
- ● 昭和57年　北海道立美術館が開館

▲雪像を背景に行われた冬季国体選手入場

1958（昭和33）〜**1982**（昭和57）

▲牛朱別川切替工事の概要図。当時の地図を見ると常磐公園が「島」であったことがよくわかる

昭和3（1928）年、初代旭川市長岩田恒は市議会に「牛朱別川切替工事」を提案。現在のＪＲ宗谷線鉄橋を起点として旭橋手前まで1.7㎞の新流路を作り、旧流路は埋立てて宅地などとして分譲するという壮大な計画でした。この計画は全会一致で決議され、昭和5（1930）年に切替工事起工、翌６年には切替が完了し、同年、旧流路の埋立工事が開始され、さらに埋立工事に伴う公園改造がなされ、翌７（1932）年には埋立工事も完成します。常磐公園と並ぶ旭川のシンボル「旭橋」新設もこの工事の一連でした。

牛朱別川切替で水害への心配が薄らぎ、旧流路の埋立てにより市街中心部と公園が地続きとなったことから、公園改造が進みます。まず公園正面入口が師団通り側より現在の７条通先に変更されました。それにより昭和10（1935）年、ある石碑がここに移設されます。それが「常磐公園」の園名碑です。この碑は昭和3（1928）年、石を山崎政五郎氏が寄付し、当時の第七師団長・渡辺錠太郎氏が筆をふるったもの。御大典記念に贈られ、現在の公会堂右側付近にあった公園正面入口に設置されていました。

「常盤」から「常磐」へ

皿は割れるが石は割れない

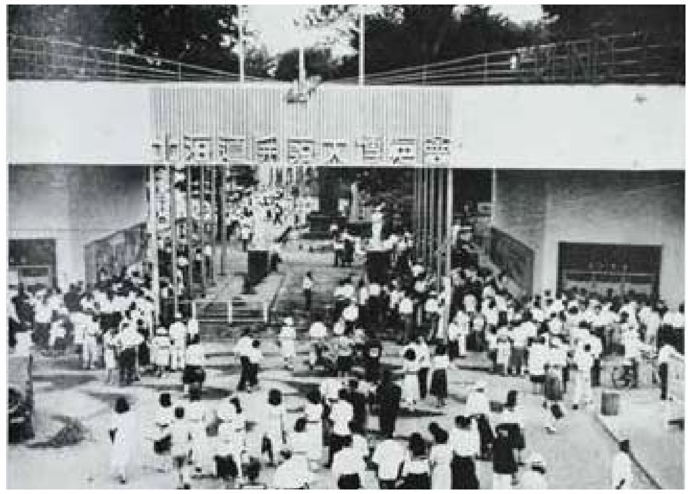
▲河川切替工事後の常磐公園。奥に写る建物は花月園

この園名碑について周辺地域が「常盤町」「常盤通」であることから、渡辺師団長が「常盤」と「常磐」を間違って書かれたのではないかとの説がありますが、渡辺錠太郎氏の令嬢でノートルダム清心学園理事長の渡辺和子さんは、旭川を訪れたときに「父がそのような単純な間違いを犯すとは考えられません。おそらく深い意味があったのでしょう。皿は割れるが石は割れない…　永久に続く…」と話されています。

公園の名称については、大正８（1919）年製図の大日本帝国陸地測量図や昭和２（1927）年発行の本田親美翁傳に「常磐公園」と書かれるなど、開園直後から頻繁に「常盤」と「常磐」が混用されていましたが、園名碑の設置以降「常磐公園」は「常盤」ではなくなったのです。

文化芸術の拠点として

まちの発展とともに文化施設が誕生



▲40日間で51万人を超える人が訪れた「北海道開発大博覧会」

▲第１回旭川冬まつり。名古屋城を象った大雪像前で剣道の寒稽古が行われている。昭和61（1986）年に隣接するリベライン旭川パークに移されるまで、常磐公園で開催された

牛朱別川の改修を経て、公園遊具、照明灯が設備され、植物園２施設、花月園などの料理店４店舗、貸ボートが５業者、テニスコート、グラウンドでの野球、自転車競走、冬季には千鳥ヶ池のスケートリンク、さらに博覧会・壮行会・お祭りなどの会場、またデートスポットとして、常磐公園は季節を通して市民に親しまれていきます。

しかし、その常磐公園にも戦争の時代がやってきます。

昭和6（1931）年、満州事変が勃発。日本は国際的孤立を深めます。収束方向が見えぬまま、昭和12（1937）年、盧溝橋事件を機に中国との全面戦争に発展、さらに昭和16（1941）年には太平洋戦争へと突入していきます。

戦時統制の影響は常磐公園にも及びました。金属供出による岩村通俊卿銅像の引き渡し、市民ボートの禁止、園内料理店の廃業、さらには食糧増産のためグラウンドが畑に改造されるなど、その姿を大きく変えたのです。

しかし終戦を迎え、混乱が落ち着きはじめた昭和24（1949）年になると、バレーコート、バスケットコートが新設され徐々に復旧されていきます。

公園が飛躍的な復活を遂げる契機となったのは昭和25（1950）年、戦後の北海道で最初に開催された「北海道開発大博覧会」です。第一会場となった常磐公園には多くのパビリオンや遊具が置かれました。なかでも築山に建設された天文台は自治体設置としては全国初。今もその姿を残しています。来場人数は開催期間の40日間で51万人余。市が年間予算の３分の２にあたる額を投入した一大イベントは大成功に終わったのです。

これを機に常磐公園は施設の充実を図り、博覧会のメイン施設を残して体育館とし、昭和33（1958）年には公会堂、図書館、昭和38（1963）年に青少年科学館を建設、また催事では昭和35（1960）年、「第１回旭川冬まつり」を開催するなど余暇と芸術・文化を育む場へと発展していくのです。